

砧

円地文子

文藝春秋刊



砧 奥付

昭和五十五年四月十日 第一刷

定 価 一、五〇〇円

著 者 円地^{えんち}文子^{ふみこ}

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

郵便番号 一〇二

電話東京(〇三)二六五局 二二一

印刷・精興社 製本・加藤製本 製函・加藤製函

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

©Fumiko Enchi 1980

Printed in Japan

目次〈砧・円地文子著〉

砧

7

友達

25

菊

43

鶏

59

花咲爺

81

絵が話す

99

文反古

119

地震今昔話し

139

明治の終りの夏

155

間わず語り

169

単身赴任

189

落葉の宿

205

囃言

227

浮世高砂

255

装幀
磯谷時子

砧

〈岡地文子創作集〉

砧

さして痛い痒いがあるというでもない持病の治療に二月近くも病院暮らしをつづけていると、病室が借家住いのような気もして来るし、昔イギリスの評論家のエッセイで読んだ贅沢な禁固生活のようでもある。長年つかって来た身体の修繕だと思えば仕方がないと諦めてはいるものの、夜の眠りにうまく誘いこまれない時はまことに辛い。いつも同じような愚痴をこぼすではないが、眼の不自由になって以来活字をよむのが辛く、よんどころないもののほかは読まないことにしている。まして夜は明るい電灯の下でも読み書きはしないので、カーテンを細くあけて、夜の空をのぞけるようにして置き、仄暗い中に横になっていると、否応なしに、過去現在、未来に渡る記憶や想像が取りとめもなく浮んで来、その中をさまようことが唯一の憩いでもあり、慰めでもある。

るのだった。四年前に眼を煩って入院していた時には、今よりも遙かに心が苛立ち、時に床を離れてふらふら病院の屋上まで迷い出て行きそうな時があった。その頃に較べると視力を失う不安も、死に心臓を擱まれる怖しさもはるかに薄らいでいる。つまり四年間の半盲に近い不自由な生活の間に、自然に死と馴染むようになったのかも知れない。

考えてみると前に入院していた時、よく見舞いに立ちよってくれた肉親や親しい友人も幾人か亡くなっている。その人たちは、昔々に死んだ私の両親といっしょに時々この病室を深夜におとずれて来る。誰もやさしい身体つきで顔にはおだやかな微笑を泛べ、おいでおいでと私を招いているようである。招かれると私自身もやさしい気持になり、子供が手でも引かれるように彼らに行く方へ歩いて行くような気になる。宗教的な信念があるでもないのに、今はこの世にいないゆかりの人たちが何となく手をあげて招いていて、道しるべしてくるようである。こんな気分になるのも年齢が与えてくれる自然の智慧なのであろうか。

私は鳥や蟲の鳴く声をきくたのしさは人並みに知っているが、さて音楽となると、生れつき耳がうといと見えて、きいているうちに直き楽音のそとへぬけ出してしまふ。わびしいことだと思っていたが、視力の衰えて来たこの頃ではいよいよそのひもじさが増して来た。その癖、現実の聴覚は、視力はもとより嗅覚などとは比べにならないほど聴^{きこ}くて、ほんのわずかの物音や気配でも素早く捕えてしまふ。しかし、聴力の敏感だということは、どうやら喜びよりも怖れや悲しみを多く知るような気がする。賑やかな祭囃子にしても歌声にしても、その場へ行っていくよりも別のところにいて、遠くから聞えて来るもの音が耳に入ってくる時、それが喜びの歌声であって

も、賑やかな囃子であっても、音色が不確かであるほど、朧ろげな情緒に包まれて、哀しみに心が洗われるような気分を味わうのである。

その夜も、私は寝られぬままに來し方行く末のさまざまにとりとめなく心をさまよわせているとき、ふと、蟋蟀らしいか細い蟲の音が壁の中から滲み出るように聞えて來るのに気づいた。

壁といつてもこの病棟はコンクリートで塗り固められているから、蟋蟀の潜んでいる隙間などない筈である。季節は秋の末ではあるが、まだ蟋蟀が死に絶えるほど寒くはない。いったい、あの蟲の音はどこから聞えて來るのであろう。隣室との間の壁は厚いので、物音の伝つて來ることは殆どないし、仮に蟲を飼う病人があるとしても、蟋蟀を飼う酔狂人は、いくら現在の東京でもありそうにも思えない。ひょっとしたら廊下の向いの裏側に患者用の湯沸器や塵捨て場があるので、そこに捨てられた萎れた花束の中にでも蟋蟀がまじりこんでいるのであろうか。この想像は一番当たっているように思われたが、何にしても晩秋の病院のベッドに横たわりながら、深夜に蟋蟀の鳴く音をきくのは、情景が具わりすぎていて、寂寥に耐えないというよりも、芝居の合方をきいているような感じもしないではなかった。しかし蟋蟀の声は次の夜もその次の夜もつづいて聞えた。その声をきいているうちにいつか私の眼の前に薄の穂の白く呆けた野原が泛び、はたはたと何かを叩いているような強い響きが一定の間隔を置いて聞えて來た。

砧の音だと私はしばらくして思った。何でそんなありやうもないことを考えたかもわからない。私は元來、砧というものの音を現実には聞いたことはないのであつた。岡本綺堂の修禪寺物語という有名な芝居の幕開きに、美しい姉妹の田舎娘が紙砧を擣っている場面を見たのが砧とい

うものを知った最初だったろう。日本でも王朝時代の打絹というのは、砧で搗って滑かにした絹をいうらしいから、その頃には、砧も多く使用されていたかも知れないが、中国や韓国では、日本よりも砧の使用が多かったのか、殊に中国の古詩には砧を歌った作品が多い。設定は全部といってよいほど夫を遠征に徴発された庶民の家で、長い間帰らぬ夫を待ち侘びている妻が砧を打っている。時は秋、明月の夜という情景である。李白の「子夜呉歌」には、

長安一片月

万戸搗衣声

秋風吹不_レ尽

總是玉関情

何日平_ニ胡虜_一

良人罷_ニ遠征_一

とあって、私は今も愛誦している。前に書いた情景も多分その詩から勝手に描き出したものである。「八月九月正に長き夜……千声万声やむ時なし」というのは誰の詩だったろうか。ともかく秋の夜深け、孤閨を守っている若い妻が夫を待つ思いを、生活のための砧の槌に籠めて、厚い木の台の上にのせた布を搗つ。搗つ槌は軽く拍子をとって運ぶけれども、搗っている女の心は憂いに閉ざされて重く、槌をうつ手もときには万感がこもっている。その槌の音が一軒ばかりでなく、どの家からも聞えて来て、恰も空に照る月に対して数知れぬ女の嘆きの声が、奏鳴音をなしにしているように思われる。砧の音には勿論蟲の音も交り、白い薄の穂も月明のもとに揺れているであらう。

私は、蟋蟀の鳴く音に誘われて、現実なきいたことのない砧の音をきき、月下の薄原をゆめみているうちに、ふと、その呆けた穂の中に立っている女の姿を見出していた。

そうだ、あの人のことを思出していたのだ。私はそれまで眠っていたのでもないのに夢からさめたように思った。

二十年近い前、武蔵境のあたりに住んでいたその人を訪ねた時の記憶が、今眼の前にあるようにまざまざと甦って来たのである。

藤木由美という名のその女のひとと、私は三十数年の昔、軍隊の慰問旅行の一団員として南支へ行った時偶然なめぐり合せでいっしょになり、一月半ほどの間、焼けただれた南支の港町から海南島まで言わば一つ釜の飯を食べて過したのだった。

由美女ともう一人の連れは歌と三味線で、日本舞踊の若い踊り手も一人加っていた。作家や漫画家にそういう娯楽面の人まで盛りこんだ混成旅団であったが、十人の一行の間には、長旅にあり勝ちな揉めごともなく、至極無事に旅程を終えたのである。

由美女の生立ちについて私はそれまでまったく知らなかったが、当時、古今^{こきん}楽団という和楽の新流派の中心であり、もとは歌沢の寅派で名の通った師匠だということであった。由美女が古今楽団の中心にあるのは、勿論、技能の冴えていることも確かであるが、彼女のパトロンが有名な富豪で、遊蕩児としても聞えた、有竹一郎であるためであった。有竹は女道楽だけでなく、芸能面にも趣味が深く、和楽によるオーケストラ風な楽団をつくり出したい夢を持っていた。その夢は和楽の持つ性質から結局成功しなかったが、ともかく古今楽団を組織し、その中心に藤木由

美を据えた。

由美女は美貌と才能の持ち主であったが、それ以上に苦勞して育った生立ちが氣持をいじけせず、他人の中に自然に溶け入って行く才覚といつしよに辛抱強さを持っていた。富豪の二代目といつても、もともと商人である有竹は自分の持ちものとして、由美女を見ているうちに彼女の伶俐さとなみなみな意志の強さにうなづくものがあつて、実のところ、由美女という女がいればこそ古今樂団は成立つて行くと、目処をつけたのであつた。由美女は幼少から寄席芸人上りの一方ならずやかましい養母に育てられて、芸はみっちり仕込まれたものの、彼女を金蔓にするのが養母の主な目的だったという。有竹の世話になる前にも、由美女は何人かの男を知っていたが、彼女の持ち前の派手な愛嬌と実意のある氣質はどのパトロンからも愛され、興ざめな扱いを受けることはなかった。よい男たちに巡りあつたことも事実だったかも知れないが、それ以上に彼女自身の身につけた賢さが天性の美貌や芸才を引き立てていたためであろう。有竹にしても、他に数人の愛妾を持っていたが、一番氣に入っているのは藤木由美だというのが當時の定評だったという。その長旅の間、寝起きを共にして、荒海を船で渡ったり、軍隊の駐屯している辺鄙なところまで慰間に行ったりするうちには、随分厭なことや面倒なこともないとは言えなかった。しかし、私はその間に殆ど一度も、彼女の不機嫌な表情を見たことがなかった。わがままな私は相手の出方ひとつではすぐふくれる方であつたが、今思い返してみても、由美女に対して不快な感情を持った記憶がない。

慰間に行つてひどく疲れた夜の翌る朝などでも、一行が寄り合う場所で顔を合せれば由美女は